

詩歌の里
宮城野

千三益書



菅井梅園「宮城十二景圖」一江戸時代
(仙台市博物館蔵) 上から宮城野、榴岡、木の下

詩歌の里
ここらの宿

宮城野

歌に詠まれた世界と歴史
© 仙台東ロータリー・クラブ

発行／仙台東ロータリー・クラブ 〒980-0021 仙台市青葉区中央一丁目10-25 仙台ホテル内602号室
TEL 022-223-3765 FAX 022-267-1276 mail sendai_crc@star.ocn.ne.jp

■会員◎本田正・加藤昭・西井弘・瀧美庄一郎・千葉邦男・吉田久剛・花岡十弘・森川和夫・高橋賢・浅野孝雄・筒直樹・高橋正明・小山育郎
團部明郎・千葉敏司・中條仁・堀池勇・生可元・阿部克己・岩山伸次・関衛・森聰・吉田龍八郎・福田喬・守谷たつみ・松尾啓之・松本辰三
八木河・森井希一・菅原貫治・高橋信雄・柏葉逸郎・鈴木昇・西里美亜・池田哲秀・河野正剛・大石直・斎藤勲・藤村征吉・鈴木和彦・千葉静雄
・庄子哲朗・今野忠良・新井川勝久・林沢一成・菅野義勝・三浦良爾・庄司一重・日向実・谷矢孝夫・澤田幸和・菊地洋二・庄子顕志・細川孝行
●印刷／株式会社ソノバ ●題字／千文堂

プロローグ

「宮城野」：千二百有余年の歴史の舞台

古くから、「名取を越せば宮城野よ」と呼ばれ、或いは仙台地方を指す雅名として用いられてきた宮城野は、広くは名取川以北の仙台平野を、狭くは宮城野の中に原のある宮城野原周辺一帯を指していた。

奈良時代、大和朝廷の陸奥国における軍事・政治・文化の拠点として鎮守府と国府が多賀城に、国分寺等が宮城野原の南辺に置かれ、都と「東山道」で結ばれていた。

平安初め鎮守府が北へ移り平和の地となると、寺の七重の塔を背景に萩の花咲く宮城野の里は、役人、僧、商人など人々や物資、情報が一層行き交った。そして都の王朝と歌の世界に選ばれ、以後永く陸奥有数の歌枕の地として詠まれ続け、名を高める。
平安末期、源頼朝の平泉攻めにより、

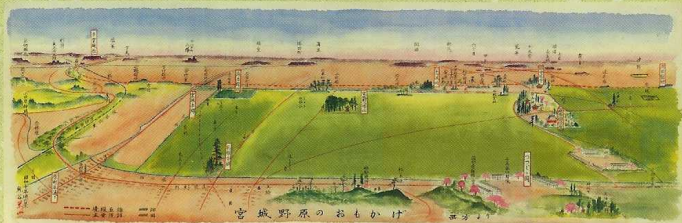
国分寺は焼失するなど一帯は荒廃、室町末期まで歴史の表舞台には姿を見せない。

江戸時代の伊達謙、藩祖政宗は旧国分寺跡に業師堂等を再建、歴代藩主は宮城野原の保護に努める。仙台城の築城候補地となった榴岡を四民遊樂の地として整備する一方、古歌の歌枕の地確定に努めるなど名所の復活を図った。しかし末期、大飢饉が相つき、藩財政は窮乏、宮城野の風情も失われていく。

明治に入り、学都、軍都として発展を始める仙台、その中で主に富国強兵の教育訓練の場として終戦まで役割を担いつつ、市内学校連合会運動会の華やぐ場等、今につながる景も垣間見せる。

千二百有余年、これら歴史が展開されてきた宮城野は、古来、時それぞれに文学の綾なす「詩歌の里」でもあった。

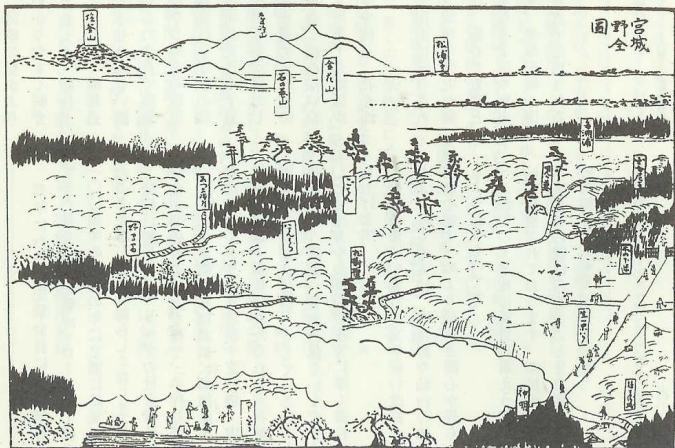
当クラブ設置の宮城野「回想板」「文学散歩文学板」を基に、「こころの宿宮城野」の歌とその世界、関連する歴史を述べていく。



宮城野原のおもかげ画 / 熊谷萬山 (仙台市歴史民俗資料館蔵)

詩歌の里こころの宿 宮城野 | 歌に詠まれた世界と歴史

ご挨拶 仙台東ロータリー・クラブ	2
祝辞 宮城県知事・仙台市長	3
宮城野回想板◎宮城野の歴史と文学	4
宮城野への道◎文学散歩道(文学板)案内	6
宮城野文学板	
◎平安時代・室町時代	8
◎江戸時代	12
◎明治時代	15
日本近代詩発祥の地仙台 伊狩弘	18
宮城野文学板関連◎歴史の話題	19
心の原風景◎宮城野と歌への想い 伊達宗弘	22
事業取り組みの経緯 庄司元	23
発刊への感謝と父の思い 高橋武雄	24
宮城野関係年表	25
参考文献・編集を終えて	28
宮城野ガイドマップ	29



「宮城野全図」奥州名所図会 (大場雄洲書、角川書店刊)

◎宮城野文学板 平安時代～室町時代

「みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

—詠み人知らず 古今和歌集卷二十 東歌—
(もし、お供の方よ、ご主人様にお笠をどうぞと申し上げて下さい。この宮城野の木の下露は、雨にも勝るほど濡れますから。)

「みやぎ野のもとあらのはぎつゆを重み風を待つごと君をこそ待て」

—詠み人知らず 古今集卷十四 恋歌—
(宮城野の根元のまばらな萩は、枝先の露が重いので吹いて散らしてくれる風を待っています。：私も同じように、あなたが来て下さるのをお待ちしています。)

古今集に初出詠のこの二首により、宮城野は王朝文学の世界に組込まれ、歌枕に歌に詠まれた名所として定着の土台が築かれた。

原歌の「…みかさと申せ」後ろのセヤ、「…雨にまされり」後ろのヤアノの囃子詞は除かれている。

恐らく、京下りの国司等が宮城野探訪の折、迎えた地元民が木の下露を忠告する温かい交歓の様と曲調の良さもあり祝いの唄となったのではないかと推測されている。

「恋歌」は、可憐な姿で万葉集でも最も詠まれている萩に心情を託した情景が印象深い。宮城野は、既に天平の頃には萩で知られていたことを覗わせる。

この歌を本歌とした後世の歌も多い。中でも「源氏物語」の「桐壺の巻」で桐壺帝が亡くなった女官に対する弔意と幼い子供(光源氏)を思いやって女官の母に贈った歌は有名で、影響も大きい。この中で、本歌の宮城野を宮中に、小萩を若宮にたとえ、詠んでいる。

「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」(宮中)を吹き渡り露の玉を結ばせる風の音を聞くにつけ(母君の里で日を送る若宮)が痛められはしまいかと思いやられます)

また作中の和歌を通し、作歌用参考書としても古典とされる源氏物語であり、後代への影響は大きい。

「枕草子」でも、代表的な野として嵯峨野、春日野等と共に宮城野を十指に挙げている(二六二段)

古今集は、従来の漢文、漢詩に代り、ひらがなによる、やまとうた(和歌)の初めての勅撰歌集で、九〇五年醍醐天皇の命により、紀貫之らが撰・編者となる。万葉集以降の「古」から編纂時の「今」まで二五〇年の代表的歌を集め、一一〇〇余首を選択、「四季」「恋」などを中心に折節に合わせ整然と分類し二十巻に。優れた企画と内容で教養、作歌、社交上の必携書として、また室町期までに続く二十一代の勅撰集の規範として、長く日本の和歌や文学、さらには伝統文化に大きく影響を持ち続ける。

歌風は、理知的な技巧と繊細優美が特徴だが、作者は大きく三期に区分でき、詠み人知らずの時代はその上期で、万葉風の素朴な歌や民謡風のものが多い。

「みさぶらひ」の歌は、回想板の説明文にある。東歌は宮廷や賀茂神社等の神事の際、東国の民謡が風俗歌として演じられた東遊びの歌から十四首が選ばれ、最終巻に宮廷重要行事の際の祝祭歌として収録。うち七首は素朴で民謡風の陸奥歌。中でもこの歌は名歌とされる。

「さざまに心ぞとまる宮城野の花のいろいろ虫のこえこえ」

—源俊賴「千載和歌集」「堀河院百首」—
(宮城野にはいろいろと心に刻まれることが多いなあ。花のいろいろや虫の声々に：)

源俊賴は平安中期、五代勅撰金葉集の撰者。

清新自由、客観的叙景で知られ、七代勅撰千載集にも最多五十二首出詠。堀河天皇在位時に召され、一首毎に題を設け詠進した百首和歌にも選ばれている。従来の景物の枠を超え、茫々たる宮城野に目を向け哀感誘う秋の野の広がりのある風景に想いを馳せる。一幅の絵を見るような印象に残る歌は、夥しい数の宮城野歌の中でも絶唱とされる。

「とりつなげ玉田横野のはなれ駒つつじが岡にあせび花咲く」

—源俊賴「散木奇歌集」—
(玉田横野に放し飼いの馬をつないでおきなさい。榴ヶ岡に馬が食べると酔うという馬酔木が咲いています)

新しい用語や表現で脱保守を目ざす、俊賴の自撰家集にある。圧倒的に宮城野歌枕が多い中で珍しい。また後の話題にも富む。

天平の頃から多賀城国府や陸奥国分寺をつなぐ道筋にある榴ヶ岡は、古く九七〇年代の蜻蛉日記やわが国最古

の歌題分類和歌集古今六帖にも見られる。義経伝にも載り、藤原泰衡が源頼朝の軍に抗した国分鞭桶の地ともされる。

玉田、横野の地名は、現在では消滅しているが、古い小学校等の校歌の歌詞に残る。旧仙台城下東辺の宮町、東照宮の前方、榴岡や原町の北方に広がる平野一帯（小田原田圃）を指す雅名で、藩政期から後頼の詠んだのはこの地である、と伝えられている。

玉田は遙か大昔から、天神社を祀る周辺の地名で、小田原の旧名ともいわれる。後頼は、畿内河内国（大阪府）に玉田と榴岡の隣接の地名があり、玉田地内の横野には馬酔木が多いことから、陸奥の歌の世界にもあてはめ詠んだともいわれる。作歌が殆んど実地によらず、京にて思い巡らす時代では不思議でない。

ともあれ、一時期忘れかけられたこの雅名が、その後、歌枕整備を進める伊達藩や俳人らの努力で、地域特定され、定着し、「奥の細道」でも地元俳人が芭蕉を案内していることは注目される。

以上の歌は、回想板や文学板に載る平安期のものだが、夥しい「宮城野歌」の中ではごく一部にすぎない。

「宮城野歌」の総体と詠まれた景物

(1) 遙かな陸奥への都人のロマンと憧憬は歌の多さを

化したと考えられる。

(3) 都人の宮城野への総じた想いを物語る逸話がある。一〇七〇年代、国府役人橘為仲が任を終えての帰途、土産に宮城野の萩を掘り取り十二の長櫃に納め京の町に入ると、名高い萩を見る人々で大賑いの様が鎌倉期の書に伝える。和歌や萩への想いと陸奥や宮城野への憧れの度を端的に知る縁として注目される。

「宮城野の萩の名に立つともあらの里はいつより荒れはじめけん」

— 宗久 「都の苞」 南北朝時代 —
（宮城野の萩で有名な本荒の里は、いつからその名のよ
うに荒れ始めたのだろうか）

「都の苞」は一三五〇年頃、筑紫の修行僧宗久が京を出、東海道から松島までの奥州路巡りの際、名所等の印象を都の土産にしたいと古歌や伝説等を織込み、自らの歌も交えた紀行文。その宮城野部分の原文は：

「名取川をわたり過ぐるとて、行水のかへらぬことを憐れむ。宮城野の木の下露もまことに笠をとりあへぬほどなり。花の色々露をしけると見ゆる中にも、本荒の里といふ所に色など外には異なる萩のありしを一枝折りて、「…（冒頭の歌）…」と思ひつづり待りし。この所は昔は人住みけるを、今はさながら野ら藪になりて草堂一字（「草ぶきの小屋一つ」）より外は見えず」

物語をか 近年仔細なる資料の編纂が進み 俳人の歌席
体の輪郭の把握が可能となりつつある。

「新編国歌大観」（一九八三〜八七年 角川書店）の勅撰集、私家集等全二十巻の各索引から宮城野を詠み込んだ歌を拾うと、約六四〇首を数える。歌人別では新古今集撰者の藤原の家隆や定家が十数首と多い。

また一四三九年まで五三四年間続いた勅撰集に限ると二十一集中十七集に四九首と、国府近くに多い歌枕の中でも最多。さらに古今集後長く一首のみだった出詠が、三百年近く経た平安末〜鎌倉初め、和歌隆盛期の千載集と八代新古今集に五首、四首と突出し、幽玄・余情の一流の歌枕の地として確定したと考えられる。

これら歌の殆んどが、京に居て観念的想像的に詠まれたのに対し、実際に訪れたとされる歌人もいる。十一世紀半ばの能因や実作歌を目ざし諸国を旅した歌枕巡礼の大先達、平安末の西行である。

(2) 詠まれた景物は、古今集の萩、もとあらの木萩、風、露、木の下露がまず規範となり、時と共に、鹿、花、虫の音、月、露、雪等が加わり、またその組合せにも広がり、趣きに富む風流な地の印象を深めていった。

なお、歌中の宮城野はこの時代、武蔵野と同様特定された狭い地域でなく、名取川以北多賀城に至る広い平野一帯を莫然と指し、宮城野原はその一部で、また、もとあら、木の下は小萩、露と結び詠まれる中で、固有名詞

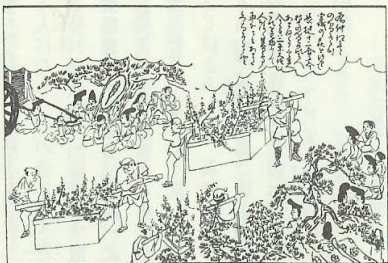
宮城野を詠んだ古歌の

語句を配し、荒れた現況と時の流れを感傷的に記し、詠んだ印象の深い文。平安末期の文治の役により荒れたといわれ、それ以降の宮城野の資料が極めて少い中で、南北朝時代の姿を知る貴重なもの。

以後宮城野は十六世紀まで、戦火や支配者の度重なる交替もあり、荒廃が続いたといわれている。



奥州名所図会「宮城野の鈴虫」
移りあへぬ花の千種に乳れつつ
風のうへなる宮城ののほら 定家
(続後撰集)



奥州名所図会 為仲「宮城野の萩」都へ持ち帰りの図

◎宮城野文学板 江戸時代

「我宿の庭の村萩咲きしより思いぞいつる宮城野の原」

—伊達政宗、京都屋敷にて、公六十八歳—

一六三四年夏、三代將軍家光の朝廷参上に際し、政宗に先駆役の命が下り、京屋敷に三ヶ月滞在中に詠んだ和歌。秀れた歌人としても名高く数も多い中で、宮城野を直接詠み込んだ珍しい一首だが、時期や場所柄からみてその意義は深いと思われる。

この時政宗は、培ってきた京文化人脈の協力を得て、一流貴紳招待の能楽を成功させるなど大切な役回りを演じ、將軍等の一層の信頼も得た。その功により京滞在中に、今の滋賀県蒲生郡に五千石の領地が与えられ六十二万石の伊達藩が確立した。大役を終えた充実感と安堵感に加え、心から語り合える木下長嘯子という文雅を楽しむ老隠士から、別れの宴の申し出もあつた時期でもある。

数年前から若林城に移り、風流の道や老臣らとの語らいを楽しむ老境の政宗には、京の人々への感謝と故郷への

想いも交錯しての発露かもしれない。なお長嘯子は、生き方や著書等を通じ芭蕉に影響を与えたといわれている。

「おくの細道」宮城野

名取川を渡りて仙台に入る。あやめふく日也。旅宿を求めて四五日逗留す。爰に画工加右衛門と云ふものあり。聊か心ある者と聞きて、知る人になる。この者年比さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一日案内す宮城野の萩茂りあひて、秋の景色思ひやらる。玉田、よこ野、つづしが岡はあせび咲くころ也。日影ももらぬ松の林に入りて、爰を木の下と云ふとぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。業師堂天神の御社など拝みて、其日はくれぬ。猶、松島、塩がまの所々画に書きて送る。且、紺の染緒つけたる草鞋一足錢す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其案を置す。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

—松尾芭蕉 江戸時代—

これは、「細道」中の宮城野（仙台）関連部分の全文で、文学板にはスペース上、一部省略され、太字部分だけが記されている。

芭蕉は古人の旅を体験し、漂泊の中に人生を感じつつ俳諧の質を高めると共に、各地で門弟の指導や句会を行い、勢力拡大を図った。「おくの細道」は芭蕉晩年四十六歳時、門人曾良と東北北陸の歌枕や名所、師と仰ぐ西行の行跡を五ヶ月かけて巡る旅の紀行文。

単なる記録や感想でなく敬愛する和歌や漢詩の目で眺め、それを表現しながら、凝縮かつ格調高い地の文と自作の句を融合させ、新たな詩的世界を持つ文芸作品に仕上げた。

理解が得られ易いよう、原文との重複を避けながら、以下若干補足する。

『多少風雅に志のある、加右衛門と知人となる。彼は、古歌に詠まれながら所在や年代がはっきりしない名所を調べ、考え置いていますから』と案内してくれた。

芭蕉は王朝歌枕の舞台を眼前にし、その詩精神に触れ、萩茂る秋の気色を想いやり、また古今集や俊頼らの由緒ある詞句を引用し、鮮かに描いている。

「彼はこれから巡る塩釜、松島等の絵地図を書き、錢に草鞋を贈ってくれた。それには折からの節句にちなみ、あやめ色に緒が染められている。旅の安全をこう心配りしてくれた彼の風流心のしたたかさに、一層さすがの思

いと感謝の念が募る。

鼻緒にあやめ草を結んで、健脚を祈り、気持も新たに、さあ旅に出よう！

—この句碑は、国分寺薬師堂境内にある—
(仙台市指定有形文化財)

〈見逃せない地元の恩人—大淀三千風—〉

この旅で、曾良は名勝備忘録を綿密に準備の一方、道中事情を随行日記に細かに記した。本文と日記との対照により、旅の実態が鮮明になり、芭蕉文学研究の手がかりともなる。

一行は一六八九年六月二十日（新暦）岩沼から仙台に入り、東照宮、榴岡天神社、木の下薬師堂を巡っている。本文に記述はないが、仙台滞在中の特に注目すべき人物に大淀三千風がいた。加右衛門から、芭蕉が仙台で会ったがっていた三千風は行脚に出た後で、彼はその門弟であることを知る。

三千風は、芭蕉とほぼ同時代の伊勢の談林系俳人。俳諧行脚を志し、一六六九年松島を訪れ、景観に惹かれ十数年地元に住居。この間俳諧指導等により地元俳壇の形成確立の一方、全国的な多彩な活動も展開、自らと地元の名を一躍高めた。来仙十年後、一日に吟じた数を競う矢数俳諧を挙行し、三千句達成の「仙台大矢数」を刊行。また松島や仙台付近の名所旧蹟を歌題に、全国から歌句

る身なり「杉屋脚草履」を千行 半い杉屋を町仕し

芭蕉も句を寄せ、この集が、奥の細道への旅の想いを加速させたとの指摘もある。さらに敬慕する西行の巡礼旅に習って大行脚し、「日本行脚文集」を刊行し、紀行文文学にも足跡を残している。加えて藩事業とは別箇に、門人等を活用し、伝承があまりない歌枕の調査を行い、現実の地に定着させている。こうした松島眺望集の執筆編集や歌枕整備に、実は加右衛門が加わっていたのである。

なお、門弟松枝朱角が自作の句を入れた三千風の追善供養碑が国分寺薬師堂境内の芭蕉句碑と並び建つ。「名の風や水想観の花かほる」(仙台市指定有形文化財)

「奥の細道」が世に出、芭蕉による俳句芸術が確立後、歌枕行脚は彼の詩魂を慕う聖地巡礼者が増え、天野桃隣、与謝蕪村、加藤暁台らも訪れ、宮城野を詠み記すなどして、新たな蘇りをもたらすのである。

「宮城野を大根植えてへらしけり」

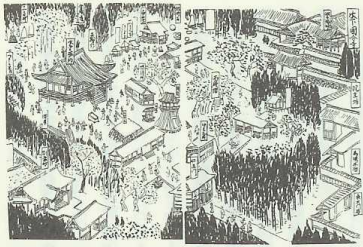
—江戸時代 遠藤日人—

この句は宮城野の変遷を知る上で格別の資料の一つ、日人(一七五八—一八三六)の活動期と天明・天保の二大さきんとが時代的に重なるためである。仙台藩でも、死者は各々二〇万人を超えたとの記録も残る未曾有の食糧不足に、かつて藩の保護にあった広い宮城野原からも、

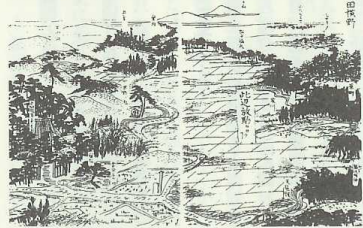
こころして月影の面影オシシツキ、ナド、ア、オン。

日人は、桃生生まれの藩士で、鈴鹿流長刀の名手で石巻に住み、俳人としても優れる。芭蕉を尊敬し、自らを芭蕉庵と号し、門弟も多く白石の松窓乙二とともに全国にも名の知られた地元俳壇の重鎮。芭蕉研究者としても名高く「芭蕉翁系譜」「蕉門諸生全伝」等は、後世の研究者の貴重な資料として活用され、曾良の「随行日記」の発見にも役割を果たしたとも伝えられる。

なおこの句碑は、藩の野守役だった「永野家」の屋敷内の天然記念物「乳銀杏」の奥に、大正七年建立されている。



「木下国分寺」奥州名所図会



「玉田横野」奥州名所図会

◎宮城野文学板 明治時代

若菜集(草枕より)

心の宿の宮城野よ、乱れて熱き吾身には、日影も薄く草枯れて 荒れたる野こそうれしけり

ひとりさみしき吾耳は、吹く北風を琴と聴き 悲しみ深き吾目には、色彩なき石も花と見き

—島崎藤村 二十六歳の作—

「若菜集」は、二五歳の藤村が明治二九年九月から十ヶ月間東北学院の教師として滞在中に、和歌や俳句を超える日本の新体詩を目ざす同人誌「文学界」等に発表の中から、五一篇を選び自費出版した歌集。藤村にとり仙台行き決意までの四年間は、木曾の生家の没落、教え子との恋愛、同志北村透谷の自殺等で失意と放浪の状況が続いていた。「草枕」は、こうした自らを道を求める旅人に見立て、秋冬の暗い漂泊を重ねた末、希望の春到来に至る心の軌跡を全三十節に描いた作品で、この詩はその第十、十一節。「宮城野にまで迷ひ来ぬ」旅人が、こころに生

の曙」を感じさせる起死回生の場であることを確信する。

…そして最終節「…春や来ぬらむ東雲の、潮の音遠き朝ぼらけ」と結ぶ。「草枕」の中でもより感動的なこの二節は、青葉城址にある藤村詩碑にも刻まれ、また藤村自身も、後年しばしば仙台時代の回想を感謝を込めて記している。「あの東北の古い静かな都会で私は一年ばかりを送った。私の生涯はそこへ行って初めて夜が明けたやうな気がした。(略)…「若菜集」は私の文学生涯に取って処女作とも言うべきものだ。その頃の詩歌の領分は非常に狭い不自由なもので、自分達の思ふような詩歌はまだまだ遠い先の方に待つて居るやうな気がしたが、兎も角も先蹤を離れやう、詩歌といふものをもっとも自分達の心に近づけやうと試みた。…黙しがちな私の口唇はほどけてきた。(心の宿の宮城野よ…(以下略))

(改訂版「藤村詩集」《四詩集の合同本》序)

◎仙台での藤村の生活ぶり(随想等から抜萃)

(一) 荒浜にて友と遊ぶ

「同僚の春旅若と共に仙台から青沼まで歩いて行くと、ほど、心を打たれたこともなかった。その時、私は生まれて初めて大洋を望んだ、といほどに思った。」（「早春」）（注）布施淡は東北学院の美術教師。歳も近く、情が厚くささくで、宮城野や松島にも共に遊ぶ親友で他の同僚らと藤村を支援。図書館の豊富な蔵書や二高教授らとの交流も藤村を喜ばせた。

（2）名掛丁下宿 三浦屋

「仙台の名掛丁といふところに三浦屋といふ古い旅人宿と下宿を兼ねた宿がありました。——中略——あの裏二階へは、遠く荒浜の方から、海の鳴る音がよく聞えて来ました。「若菜集」にある数々の旅情の詩は、あの海の音を聞きながら書いたものです。」（「市井にありて」）（注）三浦屋跡周辺は仙台駅東土地区画整理地域となり、地元の要望と事業進行に併せ昨年八月仙台市が「若菜集」の表紙の蝶をモチーフに藤村広場と日本近代詩発祥の地、仙台名掛丁藤村下宿「三浦屋」跡の記念碑を設置している。

◎「若菜集」中の主な宮城野詩篇（詩人・評論家／藤一也氏による）

「潮音」（荒浜、三浦屋）
わきてながるる やほじほの そこにいさよふ うみの

詩作から明治中期の宮城野原が偲ばれる。臥城は、角田市生まれの詩人評論家。二才で河北新報歌壇の撰者、また本県最初の文芸雑誌「新韻」を主宰発行などとして県内歌壇の発展に貢献の一方、中央にも知られる。藤村からも、明治四一年小説刊行に際し、「生の曙の地仙台」への想いを込めた「序」が贈られている。

「夏は来ぬ」（石川啄木 明治三八年）

夢心我は来ぬ。——いにしへの宮城野の、さすらひや、おちうど心、立ちて物思ふ岸の宿 さなり その川清し——中略——

天地に夏は来ぬ。——打恨み、来て寝れば、旅やかたこの落人に似たり、しばなく杜鵑さなり、その夜の鳥

明治三八年五月、処女詩集「あこがれ」を土産に二十才の啄木が来仙した。臥城を訪ね、その案内で土井晩翠に会い、世話になった。

盛岡に帰ってから、二人に感謝の念を込め送ってきたのが、この詩である。

明治に入り大きく変る詩歌の里「宮城野」である。しかし藤村や晩翠らによって再び灯された新しい光は、仙台や日本の永遠の文化として大きく膨らむのである。

あつめ とさみちくれば うららかに とほくきこゆるはるのしほのね（注）若林区荒浜南丁に歌碑あり）
「秋風の歌」（新寺小路、薬師堂仁王門）「深林の逍遙（薬師堂木ノ下）」「草枕」（宮城野原 荒浜、深沼海岸）「酔歌」（三浦屋）

◎「若菜集」等藤村詩作の影響

「若菜集」は、伝統的な和歌の修辭を基調にしつつも、人間性と感情の開放を、清新な感覚と表現によって、青春の抒情と憧憬の形で結晶させた。

それは藤村自身の人生と歌の新生を伝えると同時に新しい時代が求める新声でもあった。驚く程の共感と波紋の下、日本近代詩の革命児として「新しい詩歌の時」を導くと共にその後の日本詩歌壇の混乱期に繋ぐのである。

◎回想板に記された二人の詩人

「宮城野に立ちて」（吉野臥城）「野茨集」明治三五年）
秋九月西吹くゆうべ 宮城野のほとりに立てば雲らぎれくれなみにとび おくれたる燕悲しむ——中略——
萩いづら大根のはたけ 虫いづら馬蹄のひびき 賤の男は鎌をになひて 鄙ぶりを唄うてすぎぬ



「藤村広場」(写真/名掛丁東名会)



「若菜集」表紙(仙台文学館)



「日本近代詩発祥の地」の碑



仙台時代の島崎藤村の写真(藤村記念館)

発刊への感謝と父の思い 元宮城県図書館長 高橋武雄

私は冒頭の挨拶等で紹介されている高橋秀治の二男で、平成九年度榴岡にあった県図書館に勤務の時以来お世話になっていた者です。父は平成元年没しましたが、今回の計りに母ともども喜ぶ姿が目に見えます。仙台東ロータリー・クラブはじめ県や市、関係機関、地域の皆様方などのご支援とご協力にまず厚く御礼申し上げます。今回の出版に際し、宮城野回想板や文学板を素材に、盛り込む内容や読者層の問題、手づくり事業とはいえ相應の誌面をどう作るかが課題となりました。このためまず原点に帰るべく、事業の発端となった父の呼びかけの思いを地元同人誌等から拾い出し、見ました。

それは宮城野に関して、由緒ある歴史的、文学的意義が一般にはあまりに知られていないことへの不満、戦後の急激な変化の速さにその風情が全く失われてしまふのではないかと不安、地理的に恵まれながら歴史に翻弄されてきた地への同情等でした。加えて国民の兵役義務の養成所、練兵場として、この地から戦地に送られ、散った多くの仲間や青年達への供養の気持です。自らも宮二女高等の教壇に立つ身ながら応召され、戦地で負傷しているだけに一層強かったと思われまます。提言もありました。歌と秋の名所「宮城野」の中心で市民憩いの場である榴岡公園に、ハギの見本園や四代藩主綱村公や関連する彫刻等を設置し、由緒ある文学性、歴史性を踏まえた名所の再活性化。名掛丁等に藤村ゆかりの記念碑の設置や宮城野等と結んだ新しい観光ルートへの組入れや開発。野草園

と呼びし、市街地等での市民、地域参加型の秋祭りへの発展等です。一方、図書館等で参考文献をできるだけ調べた上で、手づくりを活かし独自の視点や地道な作業を行い、誌面構成を図りました。結果、一連の作業を通し、改めて地域文化資源として恵まれた宮城野を再認識すると共に、自らの無関心に恥じ入りました。そして折角の資源をもっと身近に受けとめ、生活や地域づくりに活かす大切さを痛感しました。わずか一年とはいえ榴岡での図書館勤務が縁で、記念すべき年に発刊できた不思議を感じます。蛇足ながら今年、宮城野が古今集に初登場し千百年、新古今集により確固の歌枕の地として築かれて八百年の節目の年にあたるのも不思議です。

宮城野関係年表

時代区分	年号	主たるできごと
2世紀頃	南小泉遺跡	
	法隆寺古墳	
5世紀後半	遠見塚古墳	
	和綱5 (平城京に遷都)	759 「万葉集」成る。(天伴家持)
奈良	神亀1 多賀城に陸奥国府設置	782 天伴家持、陸奥国、鎮守府置。按察使として着任。785年没す。
	天平13 陸奥国分寺、国分尼寺創設	905 (延喜5) 古今和歌集、勅撰和歌集の始まり。「宮城野」登場。歌人知らず(回想板No.1)。歌人知らず(文学板No.1)
	15 (平安京に遷都)	この頃より「宮城野」の地名が表れる。(平安京時代) 能因法師(880)、「藤原実方」「陸奥行」として来任(905)。998年任所にて没す。
	17 宮城野八幡神社、坂上田村麿の勧請により、宮城野の地に記る	998 清少納言「枕草子」1003 紫式部「源氏物語」…回廊板 承暦の頃(1077-1100) 陸奥守「藤原為仲」(京に宮城野の歌を持つ) 源後頼(1055-1126) 文学板No.6 千載和歌集「堀河邸百首」 文学板No.6 (兼集)「歌女奇歌集」
	21 陸奥国分寺立通堂、雷火のため焼失	1190 西行「山家集」成る。79才
	承平4 (平賀中尊を尊成) 陸奥守兼按察使として着任	1200 「新古今和歌集」成る。「古今集」からの勧撰和歌集「八代集」
	1181 藤原秀衡(藤原守)に任せられ、連判朝の追討命でされる	この頃より「宮城野」荒れ始める。
	文治1 藤原泰衡、連判朝との戦いで、国分原(現、現在の榴岡)に陣をとり、この戦いで、国分寺、国分尼寺に焼失	1350 (天平15) 僧宗久「都の首」文学板No.7
	建久3 源頼朝、奥州総奉行を多賀国府に置き、伊沢家系を留守職に任す	
	建久3 源頼朝、鎌倉に幕府開く	
鎌倉	永仁5 孝勝寺開山(東九番)	
	建武1 北畠顕家、陸奥守となる。(父)親房、義長親王と奥州七(向す)	
	建武4 多賀国府陥り、顕家、靈山に移る。	
	1334 南北朝	
	1337 南北朝	
	1392 応永1 (足利義満、太政大臣)になる。	1439 (永享2) 後花園天皇、勅撰和歌集の最後「新統古今集」成る。古今和歌集21代集。533年(3300)頃
	1394 応永1 (足利義満、太政大臣)になる。	
	1577 天正5 陸奥守(山)藤原(山)仙仙、青葉山に仙台城築城	
	1600 関ヶ原の戦い、伊達政宗、青葉山に仙台城築城	
	慶長7 岩田山より仙台に幕府・町人入移す	
室町	徳川家康、江戸幕府開く	
	慶長9 仙台城に移る。(総戸数10800戸、人口50000人)	この頃より、伊達政宗による伊達藩及び仙台城下まわりのまちづくりが著し始める。各種整備準備がはじまる。
	慶長12 寶曆堂、白山神社竣工(天竺八幡神社)。1600年に松島五大堂(支倉長政ら連敗後)として派遣(百の浦出港)	
	慶長18 川村孫兵衛による北川村(仙)工事完成	1627 (寛永4) 政宗、若林城に居館築き、車馬の居館所とする。
	寛永19 伊達政宗没す(73才)	1631 (寛永8) 伊達政宗88才の時和歌文学板No.3
	寛永19 今の元寺(八幡より八)遷し寺を移し、新寺(小除)と称す	
	寛永19 圓分寺(源)遷り、伊達政宗の遺徳を祀る	
	640 寛永19 圓分寺(源)遷り、伊達政宗の遺徳を祀る	
	640 寛永19 圓分寺(源)遷り、伊達政宗の遺徳を祀る	
	640 寛永19 圓分寺(源)遷り、伊達政宗の遺徳を祀る	